

令和7年度 学校経営報告書

八王子市立檜原小学校

校長 佐藤 栄太郎

I 教育活動の目標と方策についての成果と課題【】は目標値

「形式的な取組」を見直し、「本質的な取組」を中心とした学校教育へ。

- 1 自覚的な「学びの構え」を育成。次の行動を自覚し、自らを律する力の育成
【授業や集会、行事で育成を図っていく。QUテストにおける80%以上の肯定評価へ】

今年度は、“自覚的な”学びの構えの育成を掲げて取り組んできた。継続して取り組み、朝会や行事の中でも、繰り返し具体的に伝えてきた。また、2学期には運動会や50周年記念式典、学芸会もあり、自覚的に取り組むチャンスも多くもつことができた。その結果、毎週の朝会の並び方も、一人一人が自覚をもって自立した立ち方をすることができていた。一時期のものとしてではなく、それを自覚的に自分のものとして取り組む姿が今も続いている。

探究力の育成に向けた「やる気」の育成結果として、今年度もQUテスト9項目中、「みんなで協力」「まとまって取り組む」などの8項目で80%以上の肯定評価となった。毎年の課題としている「答えたり発言したりするのは好き」の項目も、肯定評価が増加しており、特色ある教育活動としての「追求のNARAHARA」の効果が出ていると考える。他校からの参観者が来た際にも、本校の児童の発言力に対する称賛をいただく機会が増えた。

- 2 本質的な学力の向上（グライダー型人間から、自律走行できる飛行機型人間への育成）
小4段階を確実に越えさせる。「現実には常に公式をはみだす」新たな公式の追求へ
【はちおうじっ子ミニマム 2回目での習得率向上と、その後の繰り返し習得へ】

市の学力調査結果の変容（昨年度から3回分を比較）を正答率で見ると、同学年での昨年度との比較では、4年生が国語で約10ポイント、算数で約4ポイント上昇。5年生はほぼ変わらず。6年生は国語で約3ポイント上昇したが、算数では約10ポイント下がった。また、今年度の2回分の比較では、5年生の国語が約7ポイント、6年生の算数が約3ポイント上昇した。その他の部分では、ポイントが下がったため、その分野については内容を精査し、繰り返し学習による確実な習得に向けて取り組みを進めていく。

上記の結果を基に、今後も学年の実態に応じて基礎基本の徹底を図るとともに、既習事項を活用した学習にも意識的に取り組んでいく。また、今年度取り組んできた児童の実態把握の取組や、探求学習も発展継続できるよう取り組んでいく。

3 豊かな心の育成（公共力を育成し、共生社会人へ）

正すべき時は「ならぬことはならぬ」の精神。相手の心が心に染み入る高次情動の育成気になることは先手を打って、即日対応。ハウレンソウで重大化防止。

自らの成長に他者の存在が必要なことを実感させ、自他を大切に感謝へとつながる教育【未然防止及び組織的な早期対応に努め、引き続き、いじめの重大案件ゼロへ】

いじめ対応では教育相談委員会及び校内委員会を中核として、早期発見、早期解決に努めてきた。不登校対応に向けても、校内委での別室登校などのほか、様々な外部機関と連携をして多様な学びの形態を模索してきている。また、橿原中学校区での連携も行い、広域での連携にも努めてきた。

いじめの早期発見と早期解決に向けた「教育相談委員会」を実施し始めて4年が経過した。いじめの防止とともに、不登校及び登校渋り、学習や学校生活への意欲向上への取組も同時並行で進めてきた。いじめアンケート調査では、軽微のいじめも見逃さず教職員全員で取り組むことを心掛けてきた。昨年度からの持ち越し7件と、今年度に新たに4件をいじめと認定した。そのうち7件が解消し、4件が経過観察期間となっており、不安等が取れるまで継続見守りとしている。なお、いじめの重大案件は0件である。今後も児童一人一人の実態に応じた取り組みを模索し続けていく。

4 体力・運動能力の向上（生涯体育への目覚め）

遊びを含む体力向上の場を工夫。体力基礎としての走力・柔軟性の育成
「できた！」を味わう授業づくり

【体力調査における走力、柔軟性のスコアを前年度越えへ】

今年度は、生涯体育を目指し、より多くの児童が体力づくりに取り組めるように「外遊び週間」を毎学期実施した。また、毎朝の「ならはらスポーツタイム」も継続実施してきた。どちらも任意参加であるが、多くの児童が寒い冬でも意欲的に外遊びをしていた。ならはらスポーツタイムでは、始めの準備運動なども高学年児童が率先して行う姿がみられた。

今年度、新たに設置した体育科指導力向上主任によるOJTも教職員対象で実施。特に、「できる」「できない」がはっきりしやすい種目で、いかに全員が「できた！」を味わえるかを目標に跳び箱の指導などに取り組むことができた。

体力調査結果からは、走力の指標となる20mシャトルランや50m走、また柔軟性の指標となる上体起こしや長座体前屈では、平均と比べてはっきりとした優位性は得られなかった。この傾向は、「ならはらスポーツタイム」に継続的に取り組んでいる児童で

も同じような傾向が見られた。数値として現れる形での取組としては、さらに今後検討していく必要があると言える。それと同時に、生涯スポーツの一環としての価値付けは今後も継続的に行っていく。

5 健康・安全に対する意識の向上

防災、防疫「命を守る構え」の育成。実践的訓練で失敗から学び、対応力を強化

【名称を「非常時危機対応訓練」とし、教職員へも予告なし非常時危機対応訓練、複数回実施】

避難訓練を「非常時危機対応訓練」として3年目となった。また、昨年度に引き続き1学期から1年生以外は児童と教職員を含めて予告なし訓練を実施してきた。想定内容にも幅をもたせ、日時や発災内容、シチュエーションなどが教職員もはっきりと知らされないまま実施してきた。封筒訓練として、各クラスでどのような事態が起きているかも意図的に変化を与えてきた。結果として、児童よりも教職員への緊張感が高まる訓練となったと言える。と同時に、児童たちにも主体的な取組を促し、「命を守る構え」として続けてきた。訓練実施後には、学習用端末をつかった児童アンケートも任意で実施し、それをさらにフィードバックすることで、より主体的な取組へとつなぐことができた。訓練では、想定されるあらゆる「失敗」に学ぶことを意識して取り組んできた。次年度も命を守る構えを身に付けられるよう、前年踏襲ではなく常に緊張感をもって取り組める訓練を実施していく。

6 特色ある教育活動の推進（重点）

一人一人の自立に向けた『追求力』を育成する『NARAHARA プレミアム』を推進

- ① 「追求のNARAHARA」(外部にも開かれた研究を推進。座学のハレ舞台で磨きをかける)
【国語科の物語文を中核にした「追求の授業」による授業改善を校外にも開いて研究推進】
- ② 「NARAHARA サポーターズ」(地域連携力を武器に「本物体験」「人を浴びる教育」)
【積極的に地域講師等と連携し、学校評価における80%以上の肯定評価へ】
- ③ 「NARAHARA 未来会議」(児童自身の主体的学校づくり・教職員の働き方改革)
【委員会を核とした主体的取組の場・児童が校長と語る会・校務改善委員会の実施】
- ④ 「NARAHARA GLOBAL GATEWAY」(CLIL 教育・NGG 留学生企画)
【留学生の活用と縦割り活動を活用したCLIL教育の推進】
- ⑤ 「NARAHARA 危機対応」(想定外をつくらずトライ&エラーによる危機対応力)
【具体的な危機対応訓練を実施し、自助・共助を実現する「危機対応」訓練の実施】
- ⑥ 「NARAHARA スポーツ」(系統的指導と地域、連携大学と協同での体力向上策)
【日常的にスポーツを楽しむ機会をつくり、生涯スポーツへとつながる取組の実施】
- ⑦ 「NARAHARA 食楽」(毎日食育、自覚的に味わい、体づくり。ハレメニュー)
【「バースデーカレー」「ならはら力飯」や菜園食材の活用、食育メモの充実等を実施】
- ⑧ 「ナラクルーシブ」(せせらぎ教室の専門性、学校サポーター、別室登校、外部機関をコーディネート)
【個々の困り感に応じた居場所づくりの推進。登校渋り等に寄り添い、状況改善へ】

児童の「自立」に向け、教育活動全体を本質的で追求的なものへ。事務的な取組であっても、その裏に一貫して我々がもつ「方向性」があるかどうか分かれ目。思想の伝わる投げかけ、見取り、評価が学級に本質的な文化を創り出す。

檜原小6年目は特色ある教育活動「NARAHARA プレミアム」。内容を咀嚼し、それぞれに自主的、創造的な運営へ。教育は人なり。失敗も歓迎、創造的な取組を。

- ① 「追求のNARAHARA」(外部にも開かれた研究を推進。座学のハレ舞台で磨きをかける)
児童一人一人の自律に向け、「本物体験の学習」として「NARAHARA プレミアム」に取り組んできた。その中核として「追求のNARAHARA」校内外研究に取り組んできた。昨年度実施した公開研究会での成果を基に、さらに授業研究を推進するために、実践と理論の往還に取り組んできた。毎学期、研究授業もしくは巡回授業として、全クラスが授業公開をしてきた。また、授業記録を基にした授業分析にも取り組み、より省察的な実践を具体的に推進してきた。一人一人の児童の変容を創り出す授業づくりに向け、教員の実態に応じた組織的な取組ができるように、教員アンケート等もとりながら進めてきた。全校朝会でも、「座学のハレ舞台」として全学級に見に行くことを伝え、目標をもって取り組めるようにしてきた。各学年で、具体的な言葉の証拠を基にしたイメージ変化を起こす授業づくりを推進し、思考力や想像力、コミュニケーション能力の育成を図ることができた。

- ② 「NARAHARA サポートーズ」(地域連携力を武器に「本物体験」「人を浴びる教育」)
本校は、「地域との連携力」が最大の強みである。それを最大限に生かした取組が「NARAHARA サポートーズ」。東京唯一の養蚕農家の方による蚕の授業や、親子繭玉づくり教室をはじめ、織物職人による話や戦争体験の話、がん闘病をされた方の話、野菜作りや花の栽培サポート、田んぼづくり、不登校支援など、多種多様な分野で本物体験をサポートしていただいていた。新たに、地域人材からALTとして外国語指導のサポートもしていただいた。地域の緑地活用も新たに市と連携して推進。理科学習でも専門家を招聘して取り組むことができた。また、関係自治体と連携した防災企画も推進。いざというときに、防災面でも顔の見える連携づくりを進めている。
- ③ 「NARAHARA 未来会議」(児童自身の主体的学校づくり・教職員の働き方改革)
児童の主体的な取組意欲を高めさせ、教育活動に取り入れるために「NARAHARA 未来ボックス」を設置して3年目。今年度は、様々な「ボックス」の活用が進み、色々なアイデアを全校生徒から募り、それを基に企画を推進していくスタイルが定着してきた。「校長先生と語る会」では、保健委員会からの新たな提案を受け、児童発信の取組を推進した。
教職員の働き方改革も、前年度までに大きく推進してくることができた。授業改善などの本質的なことにはその分力を入れて取り組むこともできた。教職員とのコミュニケーションを重視し、働く意欲の高まり、子供たちとじっくりと向き合える精神的なゆとりがもてる職場づくりを目指して取り組むことができた。
- ④ 「NARAHARA GLOBAL GATEWAY」(CLIL 教育・NGG 留学生企画)
通称NGGとして、外国語活動を推進してきた。留学生を招聘した異文化交流も新たに実施した。独自の地域ALTも招聘することができた。また、今年度も学年間で外国語及び外国語活動推進担当を決め、教科担任のようにして取り組んできた。小中一貫教育の取組を通して、檜原中学校や陶鎔小の英語科担当者と連携をし、中学校にもスムーズにつながる取り組みを意識してきた。学年に応じて書く活動も適宜入れるなど、話す活動以外のバランスも考えながら実施してきた。特別活動とも連携し、2年目となる「たてわりオリエンテーリング」にも外国語活動を取り入れるなど、教育活動全体を通して外国語に触れる場をつくれるよう取り組むことができた。
- ⑤ 「NARAHARA 危機対応」(想定外をつくらずトライ&エラーによる危機対応力)
これについては、上述した「5 健康・安全に対する意識の向上」に同じであるが、その取組を特色ある教育活動に格上げし、全体でより意識的に取り組めるようにしたこと自体に意味があると思う。

⑥「NARAHARAスポーツ」(系統的指導と地域、連携大学と協同での体力向上策)

これについても、上述した「4 体力・運動能力の向上 (生涯体育への目覚め)」に同じであるが、「NARAHARA危機対応」と同じく、この取組を特色ある教育活動に格上げし、全体でより意識的に取り組めるようにしたこと自体に意味があると考えられる。

⑦「NARAHARA食楽」(毎日食育、自覚的に味わい、体づくり。ハレメニュー)

食育の推進による残菜率の低下と、食への関心増加を狙い、生涯に渡って健康に生活する基礎づくりを目指した取組を推進。栄養士を中心とした食育も実施してきた。食べる大切さを考える「もったいない大作戦」や、「おはし名人」などの食育も実施。本校独自メニューとして、50周年記念を祝う「ならはら元気カレー」を皆で楽しむことができた。45周年記念植樹したたくさんのブルーベリーの果実を使い、スパイスもいつもより種類を増やしたカレーで、人気メニューとなった。また、がんばる子供たちを応援するメニュー「ならはら力めし」も、子供たちの大人気メニューとなり、「走り方教室」や「研究授業」などで子供たちが特に頑張る企画を応援してきた。これらの取組により、着任当初に残菜率が多い時で30%を超えていたのが、現在では20%を超えることはまずなく、数%から10%程度まで改善した。今後も、食を楽しみながら健康づくりを推進していく。

⑧「ナラクルーシブ」(せせらぎ教室の専門性、学校サポーター、別室登校、外部機関をコーディネート)

特別支援教育のニーズが増え続けており、その対応に向けて児童と保護者、教職員の連携が欠かすことができない状況である。そのために、まず特別支援コーディネーターを増員し5名体制とした。校内委員会や保護者面談も必要に応じて臨時開催もして、対応を進めてきた。また、特別支援教室を利用する児童一人一人の年間目標をいかに設定するかも重視してきた。児童の困り感や、保護者の願い、担任等からの集団内での実態把握、医療など外部機関との助言を基に、具体的な場面を想定した困り感の解消を目指して目標設定してきた。それを基に、特別支援教室で小集団指導と個別指導を実施してきた。特に、小集団活動では、活動全体の目当てとは別に、個々の課題を把握し、教職員が臨機応変に対応する授業スタイルで取り組むことができた。保護者面談や、学級での授業観察、担任との連携をしながら目標の達成に向けて取り組むことができた。

また、各学級では授業集中がしやすいよう教室環境のユニバーサルデザイン化を推進。さらに授業のユニバーサルデザイン化に向けて、校内研究とも連携して取り組みを進めてきた。特に「追求のNARAHARA」での取組とも合わせて、教材研究や教材解釈を大切にして、学習内容を明確にしてきた。意欲を引き出すために児童の疑

問から学習課題をつくることも学校全体で取り組んできた。また、一問一答型ではなく、対話を通した問題解決にも挑戦してきた。そうしたことによる学びの意欲向上は、先に示したQUテストの結果などからも成果を見取ることができたと考える。